

(令和元年五月二十三日)

紅唐子とふ椿一枝をいただきて夫と歩く宰府路明るし (吉川 敦子)

遠足の列のしんがり車椅子代る代るに押しして都府楼 (白井 道義)

飛梅の実りはじめた暖日に一際映える白無垢の娘 (小島 千明)

空路来て降り立つ古都の春風よ流れし時に幸はこぶべし (岡崎 雄祐)

さわさわと木々の葉ゆるる宮の杜植樹映して光る心字池 (横山 美恵子)

賽銭と明太おにぎり絵馬神籤財布に厳しい俺の太宰府 (松尾 麟太郎)

ひさびさに絵馬を吊して瞼閉ず眩しく萌える若葉の下に (陣内 敏夫)

宰府の杜楠の大木の根元にも小さく芽吹くそこにも春が (森 直之)

一年前合格祈願しいぎ浪人九大合格びばわつしよい (蒲原 伊織)

たゆたつて風ははこぶよはなびらをれきしのおいいつとどくのか (藤本 優菜)

旅の途中風に誘われ太宰府へ道真公と同じ空気を感じる (長江 雄大)

梅の実と同じ様にふくらむ胸気持ち新たに旅立ち決める (平野 允章)

絵馬を見てあふれる想いに胸打たれ皆合格して欲しい (北村 健)

小・中学生の部

大晦日観世音寺の梵鐘の音を聞きながら年を越すのだ (山下 涼大)

ださいふのかみさまおべんきようできますようにもうすぐ二ねんせい (三隅 月詩)

ゆうえんちはみんなの楽しいがたくさんつまっているゆうぐ (永尾 ゆうき)

太宰府市長いかいだんのぼつていく岩でかこまれきつねがねむる (三隅 小鳳)

新緑の桜並木のふもとは草木おいしげ命輝く (朝日 綾華)